

色を示し始めると言える。このことは、各地域における生活の様式がそのまま引き継がれたり、国家統一にともなって急激に変化するのではなく、社会構造の変化に各地域が適応しながら変化することを示している可能性がある。

おわりに

先王朝時代における土器の規格化について定量的分析を行った結果、土器の規格化を支持する結果となった。一方で初期王朝時代には、従来の説とは異なり地域色が認められた。今後は器形以外の属性を用いて多方面から先王朝時代における土器と生活の関係について考える必要がある。

古代エジプト、テーベ・ネクロポリスにおける 岩窟墓の造営地選定について

―第十八王朝アマルナ期以前の考察―

福田 莉紗

はじめに

テーベ・ネクロポリスには、古王国時代からグレコ・ローマン時代まで、三千年近い間に、東西三キロメートル圏内という狭い範囲に千基にもものぼると考えられる岩窟墓が造営された。このような長

期間にわたって膨大な墓が密集する墓域は、古代エジプトの中でも最大級である。

本研究は、如何にして岩窟墓の造営地が選定され、ネクロポリスが形成・発展したのかを明らかにするものである。まずは、政治と宗教の中心拠点としてテーベが繁栄した新王国時代第十八王朝のアマルナ期以前に年代付けられる岩窟墓の造営地選定の要素について研究した。尚、本研究において使用する「岩窟墓」とは英語で「Private Tombs」と称される高官や神官等の墓で、テーベ・ネクロポリスにおいては王家の谷と王妃の谷以外に造営された岩窟墓を指す。

【①岩窟墓の造営地選定の要因】

一、先行研究と問題点

従来の研究では、王墓地や葬祭殿との立地関係等、王の建築活動との関係性や、同じ社会的階層で墓群を形成していることが指摘されている。この他にも様々な要素が複雑に絡み合っているとされている。垂直分布も一つの要素であると示唆されているが、これを主軸に置いた研究はまだない。

既往研究では、現代の地名を使用した地域単位、或いは各墓群といった大きな枠組みでしか言及できていない。

二、本研究の意義と目的

テーベ・ネクロポリスの形成過程をより精緻に復原するためには、個々の岩窟墓を対象に研究する必要がある。岩窟墓の造営地選定の

構成要素と規則性を明らかにし、テーベ・ネクロポリスの形成・発展過程の一端を明らかにする。また、これを通して当時の政治と宗教の体制を考古学的立場から検討する。

三、対象資料と分析方法

第十八王朝のアマルナ期以前のイアフメス一世からアメンヘテプ三世治世代に年代づけられる三四一基を対象とした。

本研究では、称号が示す身分の高低と墓の垂直的な分布の高低の関係性から、岩窟墓の造営地選定要素としての垂直分布の位置づけと各称号の意味や機能を検証する。尚、岩窟墓の標高値は入口の床面とした。

四、分析結果と考察

先行研究では、第十八王朝初めまでは王墓との立地関係、アメンヘテプ三世治世代は墓の形態の変化に伴って低地を重要視したとされている。これらの時期を除くと、行政職の最高位であるテーベの「市長」もしくは「宰相」と、宗教職の最有力者「アメン大司祭」の墓は全てが標高一〇〇¹⁾以上と高い場所に立地している。

一方、新王国時代に岩窟墓を造営できた人々の中では最下層の「工人」は、全時代を通して標高一〇〇²⁾を超えない。よって、称号と垂直分布の相関性が指摘できる。

これに則って考察すると、テーベの「市長」より標高の低い場所に立地する傾向のあるテーベ以外の「市長」とは、双方に力関係の差があったと考えられる。

高位な称号の一つと考えられている「育児所の子」は、他の社会的階層が高い人々と相反する分布傾向を示し、他の高位な称号と質を異にする可能性がある。

岩窟墓の造営地選定において標高の高さが意識されたのは、視認性が非常に重要だったからだと思われる。

【②岩窟墓造営時期の推測】

高位な称号を有する母親を持つ場合、息子は高位な称号を得ることができる。高位な称号を有する妻を持つ場合も、姻族から称号を継承することで昇進する。このことから、それぞれの場合の垂直分布の傾向を比較することにした。分析の結果、異なる分布傾向を示したことから、この差異は岩窟墓造営地の割り当て時期に起因するものと考えた。

五、先行研究と問題点

通常、岩窟墓の年代決定は内部の施工や副葬品の様相から検討される。しかし、称号と垂直分布に関係性がある場合、墓地が割り当てられた時期に所有していた称号によって造営地が変わるはずである。よって新たに、造営地の決定時期を推測する必要がある。

六、分析結果と考察

高位な称号とは、王宮に仕える「侍女」、元々身分の高い女性が多くなることが多い「歌い手」、王族の「養育係」である。前述の通り、第十八王朝初めまでとアメンヘテプ三世治世代を除くと、高位な称号を有する母親を持つ場合は全てが標高一〇〇³⁾以上と高い場所に

立地している。

一方、妻の場合は一様ではない。このことから、墓地の割り当ては結婚前の仕事の経歴もまだ浅い比較的若い年齢でなされたと推測する。標高一〇〇^{メートル}以下に立地する岩窟墓の被葬者の血族には高位な称号を有する者が確認できなかった。標高一二〇^{メートル}以上の岩窟墓では、半数が有力な血族の存在等、出自の良さが判明した。よって、墓の垂直分布には被葬者の称号だけではなく、出自も影響していると思われる。

七、結論

本研究によつて、第十八王朝アマルナ期以前のテーベ・ネクロポリスにおいて、垂直分布が社会的階層を反映し、造営地選定の重要な要素の一つだったことが明らかになった。また、墓地の割り当てが結婚前であるとすれば、出自も垂直分布の高低と造営地選定に影響する重要な要素であったことが明らかになった。